

令和4年度 福井県立奥越特別支援学校 学校評価書

【担当部】 具体的取組	項目	成果と課題	改善策・向上策
【図書研究部】 主体的な学びに沿った目標設定と支援、学びの多様な評価により、児童生徒が自ら考え、気付き、表出する学びを支える授業作りに取り組む。		<p>昨年度の研究を継続しつつ、研究テーマを「子どもの『主体的な学び』を保障する学校づくり」とあらため、「主体的な学び」の視点からの実践を省察・改善することを目標とした。</p> <p>研究体制としては、昨年同様に定期的な実践の話し合い(月1回、少人数、学部縦割り)を基盤として、「教員授業参観週間」や「外部専門家活用事業」も活用し、様々な視点からの意見を交わすことで、子どもの学びの捉え直しへつなげるようにした。</p> <p>教員の評価の結果を見ると、A+Bが97.7%であり、高い割合で「子どもの主体的な学び」を意識した授業作りができたとの回答であった。学校としての意識の高まりが伺われ、昨年度に課題として挙げた「話し合いと実践とのつながり」の改善にもつながっているのではないかと考えられた。ただ、人数ではC,Dが減じているものの、A,Bは昨年度と分布がほぼ同じであることから、今後とも改善へ向けた努力が必要であると考えられる。</p>	<p>今年度は、研究グループを見直し、それぞれのグループ人数増と学部縦割りで構成した。また、図書研究部員が年間通じてファシリテーター役を務めるようにした。</p> <p>研究スタイルの継続により、話し合いにもより積極性が見られ、毎回活発な意見交換が行われた一方、「子どもが何をどう思い、考え、学ぼうとしているか」ということが話題の中心になりにくい印象があった。引き続き、「子どもの視点に立って話し合う」という意識の向上が必要であると考えられる。</p> <p>加えて、今後は研究という側面からも、事実や記録などの根拠に基づいた意見の交換や話し合いを進め、まとめる際の方法について具体的に明示するなど、研究会の運営について改善したいと考える。</p>
【幼小学部】 主体的な学びに沿った目標設定と支援、学びの多様な評価により、児童生徒が自ら考え、気付き、表出する学びを支える授業作りに取り組む。	教育課程・学習支援	<p>小学部では、主体的な学びを目指し、参加の機会や活動量を増やすこと、授業の中で「できた」という達成感や「やってみよう」と思える意欲が得られることを大切に挑んだ実践を行った。様々な授業で、児童自身が何をやるかが分かり、自ら行動したり挑戦しようとした姿勢が多くみられるようになった。その結果、自分を発揮する力、活動に前向きに取り組む力が身につけてきている。</p> <p>今年度は新型コロナウイルスの状況を注視し、対策に十分留意しながら、宿泊学習や各種校外学習を実施することができた。児童はこれまでの学習で学んだことを生かし、落ち着いて活動に取り組み、一人ひとりが経験を広げることができた。</p> <p>また、交流および共同学習においては、お互いの学校のコロナ感染状況に十分配慮したうえで、直接対面して居住地校交流を行う基準が定められた。その結果、一部の児童は直接交流という形で交流を行うことができた。昨年度行った間接交流では、相手校の児童と交流学習をしているという実感がもちにくく、やり方が難しいという課題があったが、直接友達と会って活動を共にすることで、交流している相手をしつかりと感ずることができ、交流学習を楽しみに待つ様子もみられた。</p>	<p>今後も引き続き、児童の主体性を大切に授業作りを取り組んでいきたい。そのために、一人ひとりの児童のニーズを丁寧に把握し、身につけさせたい資質や能力を明確にしていく。また、これまで成果があった授業作りのポイントについて共通理解を図り、実践につなげていきたい。さらに、小集団での授業を通じて、児童同士が関わり合い、自分の力を十分に発揮する経験を積むことで、友達と一緒に学び合うよさに気付いていけるような授業作りを目指す。また、ここ数年のコロナ禍での教育活動を今一度振り返り、新しい生活様式のなかで、児童の体験活動や交流学習の充実をはかっていきたい。</p>
【中学部】 主体的な学びに沿った目標設定と支援、学びの多様な評価により、児童生徒が自ら考え、気付き、表出する学びを支える授業作りに取り組む。	教育課程・学習支援	<p>主体的な学びを支えるためには、生徒自身が願いや意味をもって自ら学びを進めているかという視点をもつことが大切であることを共通理解し、担当する生徒や授業で実践を進めた。生徒の意見を引き出しながらゆとりをもって授業を組み立てたり、生徒の発信を丁寧に読み取りながら一緒に願いや目標を作り上げたりするなど様々な取り組みが行われた。「こうしたい」「やってみよう」という思いをもち、それを表出しながら活動に取り組む生徒の様子が多くの実践現場で見られた。</p> <p>今年度は、交流学習において直接交流の機会をできるだけ増やして実施した。居住地校交流や学校間交流では、新型コロナウイルスの感染状況により遠隔配信での交流に変更した場合もあったが、約2年ぶりとなる直接交流を実施することができた。また、作業学習でも、学校近隣の地域の方を対象とした販売活動や、勝山のお花屋さんを講師としてお招きした技術指導講習会、大野の老人施設の方との交流会などの取り組みを実施した。地域社会と繋がりが多様な評価を得られることは、生徒らにとって大きな気や自信を得る貴重な機会となった。</p>	<p>主体的な学びを支えるための教師の姿勢や授業の在り方について、これまでのやり方を問い直して改善するところが多かった。一人ひとりの生徒の思いやニーズに柔軟に対応した取り組みを今後も進めていけるとよい。</p> <p>地域社会と繋がって学習を進めていくことは、活動の意義や将来の生活へのイメージをつかむことにも繋がりが、また主体的な学びを支えることにも通じる。今年度遠隔配信を活用した交流を多く行った。コロナ感染の対応策として昨年度は行っていたが、手軽にいろいろな場面で交流の機会をもてるやり方として有効であった。生徒にとっても、緊張感を感じ過ぎず、相手とのやり取りに集中して取り組むことができる利点があった。直接的・体験的な交流活動との両輪で、さらに活用の場を広げていけるとよい。</p>
【高等部】 主体的な学びに沿った目標設定と支援、学びの多様な評価により、児童生徒が自ら考え、気付き、表出する学びを支える授業作りに取り組む。	教育課程・学習支援	<p>多様なニーズの生徒が在籍している中で、主体的な学びを支えていくために、学習集団の中での個別最適な学びと協働的な学びを両立して支援していく取組を行ってきた。具体的には以下のような支援体制である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・集団が苦手な個別最適な学習を全面的に保障していく生徒 ・普段は集団の中で学習しながらも心身の状態に応じて個別に学習を行っていく生徒 ・集団の中で学習内容の理解に応じて個別的な配慮を行っていく生徒 ・集団の中で主体的に活動を進めていくために役割分担をしながら学んでいく生徒 <p>このように個に応じた学習活動を組織することで、個々の生徒が安心して、自ら考え、気付き、表出していき姿が見られた。</p> <p>また、前期と後期の2回にわたる現場実習の機会は、将来(卒業後)の自分を見つける(考え、気付き、表出する)機会となり、どの生徒にとっても主体性が問われる貴重な学習となっている。学校外からの社会的な評価を得ることで、現在の生活(学校と家庭生活)を見直す機会にもなっている。</p> <p>さらに、コロナの感染状況が落ち着いてきており、地域の行事や対外的な活動に参加できる機会が増えてきた。学校で学んできたことを地域や社会の場で生かしたり、社会参加することで新たな考えや気付きを得たりして、発展的な学びにつながる生徒もいる。</p> <p>今後も、社会の入口になる高等部だからこそ、個と集団、自分と社会の往還的な活動を積極的に組織し、生徒の主体性を後押ししていきたい。</p>	<p>個と集団、自分と社会を見つめる学びは、主体的である。学習活動を組織していく上で、より個と集団、自分と社会の往還を意識した授業作りを行っていく。</p> <p>しかし、高等部段階で心身に課題のある生徒には、ときに厳しい学習になったり、ときに混乱を招いたりすることがある。目標や内容にとらわれすぎず、生徒一人一人の心身の状態に応じて、生徒の思いを受け止め心身の回復を図りながら、次の一歩を踏み出せるような対話的な学習を行っていく必要がある。</p>

【担当部】 具体的取組	項目	成果と課題	改善策・向上策
【教務部】 地域の人的・物的資源を活用するための新しいかたちを探りながら、教育実践を行う。	教育課程・学習支援	今年度も昨年度に引き続き、コロナ禍の中で、「新しいかたち」を模索しながらの実践となった。福井県の新型コロナウイルス感染症感染状況が「福井県感染拡大注意報」レベルに下がった2学期を中心に、高等部修学旅行や小・中部の宿泊学習のほか、地域に校外学習(宇ほり、いちご狩り)などに出掛けたりすることができた。 学校祭や中部販売会では、保護者対象に、児童玄関前のピロティエを使って、対面での本格的な販売活動ができた。地域のイベント(高:チャマフェス、産業教育フェア大会など)に参加したり、外部の講師を招いての活動(租税教室、寄せ植え・フラワーアレンジメント体験)も増えてきた。 一方、沖繩県立泡瀬特別支援学校との交流(高等部1年)や勝山北部中学校との学校間交流(中部)、老人ホームや花屋とリモートでつないでのお年寄りとの交流や花屋さんの職場見学を行ったりするなど、遠隔機器を有効に使った交流も増えてきた。 少しずつではあるが、地域の人的資源や遠隔機器等を活用しながら、地域に開かれた教育活動ができつつある。学校評価アンケートにおいても、昨年度数値より「A」の割合が高く、今年度は教職員、保護者ともに実践できた実感があつたと思われる。	課題として、校内で取り組んでいるいろいろな活動を、学校全体で共有できていないことが挙げられる。せっかく地域に向けてのよい取り組み内容も各学部内で閉じてしまっている感がある。取り組みを学校全体で共有することにより、小・中・高と活動内容がステップアップできるよう改善していきたいと考える。 また、今年度については、本校創立10周年記念事業として、本校の10年のあゆみをまとめた記念誌を地域に配付したり、県庁や市役所、市民文化祭会場等で10年のあゆみや子どもたちの作品をパネルにしたものを展示したりしたことで、本校の地域に関する取り組みを地域に発信することができたと考えているが、来年度以降も、継続して発信していくことが課題であると考える。地域に開かれた学校づくりを目指しつつ、それらの活動を積極的にホームページや通信などで保護者や地域に発信していきたい。
【渉外部】 進路支援部や相談支援部と連携を図って学習会や研修会を計画したり、広報誌を通じて学習活動の様子を伝えたりする。	保護者支援	今年度は3年ぶりに体育館でPTA総会を開催することができた。また、7月に予定していた夏まつりを11月に延期して、PTAレクリエーションとして実施した。パルーンアートショーやビンゴ大会など親子で楽しみ、当日は75名の参加があつた。11月には相談支援部、進路支援部との共催で「みんなでできう、話そう、将来のこと」と題して、進路や家族についての講演会やフリートークなど4つの内容で企画した。どの時間帯からも自由に入退室できるようにし、「参加しやすかった」との感想が聞かれた。進路に関する講演会参加者が22名と一番多かった。広報誌については、各学部の学習の様子や情報、学校行事などをまとめ、予定どおり発行できた。余暇活動的な行事に比べ、講演会などは参加者が少ないため、関係教務部と協議しながら実施内容や開催日を検討して計画する必要がある。	進路に関する学習会や見学会は、卒後のことを考える上で参考になるため、保護者の関心も高く、進路支援部と協力しながら来年度も継続して行いたい。また今年度のPTA研修会では、参加時間帯が自由だったことから、保護者にとっては興味・関心のある内容に絞って来校することができ、来年度も参加形態として取り入れるとよいのではないかと考える。家族支援に関しては、出席者が多いPTA総会時に家族に関する講演会を行う予定で進めている。研修会や講習会を検討する際に、研修交流委員会や役員会などで保護者の意見や要望を聞いて、できるだけ多くの方に参加してもらえたい。
【生徒指導部】 学校行事や全校集会を学習発表や異年齢交流の機会と捉え、校内外との連携によって、一人一人の特性に合った取り組みや参加を促す。	生徒支援	今年度は、PTA総会の日に全校集会を開催することでより多くの保護者に児童生徒の活動の様子を見ていただいた。また、おくえつ学校祭の学部ごとの発表では、ここ数年行われていた運動のみの内容から、運動・音楽・作業など各学部が普段から取り組んでいる学習内容を織り交ぜた発表に変更した。参加が難しいお子さんには、作品を展示したり事前に撮影した映像を上映したりするなど一人一人の特性に合わせた取り組みや参加ができた。さらに、高等部では数年ぶりに販売を再開したことで保護者に買っていただく場面があるなど、間近でお子さんの学習の様子を見ることができた。また、おくえつ学校祭内で「創立10周年おめでとう会」を行った。これらのことから、保護者の満足度指標が90%であつたと思われる。	本校の児童生徒の特性として、一人一人の特性に合った取り組みや参加を促す必要がある。今後も校内外との連携を引き続き行いながら学校行事や全校集会を学習発表や異年齢交流の絶好の機会となるようにしていきたい。また、感染状況や社会情勢をみながら、来年度はより多くの保護者に学習発表の場を見ていただきたい。今年度の学校祭は、1家族あたりの「保護者」の来校を2名までとした。また、事前に来校する保護者のリストを作成し、感染症対策を行うなどしたが、保護者からは「保護者」だけでなく「兄弟姉妹」なども対象に加えてほしいとの要望もあるので、1家族あたりの来校者数や来校する対象をどこまで広げるのかを検討したい。
【保健指導部】 「保健だより」「給食だより」を利用し、健康・安全への意識を高め、日々の生活に生かせるよう工夫した内容で啓発するよう、毎月1回以上の発行を実施する。	安全管理	今年度、「保健だより」「給食だより」ともに、長期休業期間を除いて毎月1回のペースで発行することができた。また、それぞれ各号に、健康・安全への啓発を目的とした「やってみようコーナー」を設けた。記事内容は、クイズなど楽しめるものや簡単な運動の紹介、手洗いの動画紹介など楽しく手軽に取り組めるよう工夫することができた。 学校評価アンケートにおいて、教職員回答、保護者回答ともに、目標数値を超えることができた。各たよりの記事内容が、健康・安全への関心や意識の向上、指導への活用につながつたがと思われ。今後は、さらなる活用の充実を目標に、誌面内容の工夫だけでなく、「やってみようコーナー」をより日々の指導や生活で役立ててもらえるよう、周知・啓発の方法を改善していきたい。	「やってみようコーナー」は、継続して各たよりに掲載し、今年度同様、はびりゅうのイラストを付けて記事が見つけやすいように目印とし、意識の定着を図る。 記事内容の周知・啓発の改善方法として、教職員に対しては、賢者や各学部会での記事紹介や特に推奨したい内容については、職員室内や保健室前の掲示版に記事紹介コーナーを設けて、目に付きやすいようにする。また、保護者向けには、特に家庭で実践しやすいものなどについて学部だよりなどに記事の紹介文を掲載してアピールしたり、ホームページを活用していつでも振り返って取り組めるようにしたりする。
【相談支援部】 新型コロナウイルス禍における居住地校交流、学校間交流、地域交流の新しい取り組みを検討する。	校内・地域支援	開校以来積極的に進めてきた交流および共同学習だが、コロナ感染症対策のためR2年度は中止、昨年度はリモートの活用やお便りの交換など間接交流のみで再開したが、間接交流だけでは「相手校の児童生徒と交流学習をしている」という実感がもたれにくいという意見があつた。今年度は直接交流も再開し、居住地校交流では小学部77%、中部56%の児童生徒が希望し行った。地域の友達と直接活動を共にすることで交流している相手をしっかりと感じることができ、楽しみに待つ児童生徒の様子がみられた一方、相手校や本校のコロナ感染状況などで、直接交流を計画したが延期や中止になったケースもあつた。学校間交流は中部、高等部で、地域交流は全学部で実施できた。地域交流において、中部部の販売会ではコロナ禍以降初めて学校近隣の地域の方も校内に入り、生徒の活動を直接見たり、関わったりする機会があつた。このように直接交流と間接交流を組み合わせ、本校、相手校の児童生徒、地域の方とコロナ感染症の状況に合わせた活動内容を計画し実施することができたと言える。毎年度、交流および共同学習におけるマニュアルに沿って「年度末評価シート」を用いて活動の振り返りと評価を行っている。居住地校交流、学校間交流では相手校と行い、次年度の活動へ生かしている。このような活動の様子や子どもたちの姿容をさらに保護者や地域へどのように発信していくかが課題といえる。	毎年3月に交流新聞「あしあと」を発行し、保護者、地域へ発信してきた。学校評価アンケートの結果については目標数値を達成したが、23.1%の保護者が「交流および共同学習について参加する姿を見たり聞いたりすること」が「あまりなかった」と回答した。これまでも連絡帳や保護者会等で保護者へ伝えてきたが、アンケートの実施時期が「あしあと」発行の以前であったことも要因の一つと考えられる。今後は学部だよりやホームページの掲載など、交流および共同学習実施後速やかに発信していくことを検討し取り組んでいきたい。
【進路指導部】 職場見学や産業現場等における実習を通して情報交換を行い、一人一人に応じた支援を行う。	進路支援	現場実習での評価を保護者や本人に伝え、今後さらに伸ばしていくと良い点や改善点など一人一人に応じた支援を行うことができた。 奥越地区の就労継続支援A型・B型の事業所数が少なく、作業種も少ないため、選択肢が限られることが課題である。	引き続き職場見学や産業現場等における実習を通して情報交換を行い、一人一人に応じた支援を行ってきたい。 小・中部の教員にも、現場実習の様子を見学していただいたり、PTA合同職場見学会への参加を促したりして、将来を見据えた進路支援を働きかけていきたい。